

第4節 地誌とビジュアルメディアから鈴川の富士塚の実像を探る

井上 卓哉

はじめに

「鈴川の富士塚は、富士登山の前に身のケガレを払う場所であったと考えられています。登拝者は海岸で水垢離と呼ばれる精進潔斎を行い、その際浜から玉石を持ってきて砂山に積み上げ、登山の安全を祈願したと考えられています。(後略)」

この文章は、鈴川の富士塚の近くに設置されている案内看板の一節である。ここに記されているように、鈴川の富士塚は、近世から近代にかけて記された地誌類の記載内容から、富士山信仰に関係した文化財として捉えられている。しかしながら、実際に富士山の登山者が、いつ頃まで上記のような行動をおこなっていたのかということについては不明な点が多いというもののまた事実である。

そこで、本論では、近世から近代にかけての地誌類から鈴川の富士塚に関わる言説の変遷を明らかにするとともに、富士山の登山絵図、絵葉書、空中写真といった、幅広い層に見られることを意識して発行された媒体資料、いわゆるビジュアルメディアの分析から、近世から現代にかけての鈴川の富士塚の実像を探ることを大きな目的としたい。

1. 地誌類に見る鈴川の富士塚をめぐる言説

享保18年(1733)、吉原宿の住人植松蓮知(註1)は、吉原宿や周辺地域に関する伝承や見聞をまとめた『田子の古道』を著した。この著作の原本の所在は不明であるが、写本はいくつか知られており、写本類に見られる以下の記載により、鈴川の富士塚に関して初めて取り上げた地誌として知られている。

富士塚 此山ハ自然の砂山にあらず 此辺の砂にて
わざとつき上たるはなれ山なれば いただきに宮居
鳥居有て 古木のはいゆがみたるそぎ松四方へはび
こる(中略) いずれの頃より富士参りの輩浜下りし
て石壺つつ荷い上げ 此山に登りて富士禪定の輕
からんことを頼み これにより富士塚というなり(富

士市立中央図書館 2007、27-28 頁)

この記載では、富士塚は人造の砂山であり、その頂上に宮居(神が鎮座する場所)があるという。また、富士塚という名前の由来として、富士山に参詣する人々が登山の前に浜へ下り、浜の石を一つづつ担ぎ上げて道中の安全を祈願したことが記される。

ここで注意しなければならないのは、植松蓮知が『田子の古道』の巻末に、「此辺の古きいわれを伝え聞きてのみ、又、愚か(な)る舌、目、身見覚たる事を書添え」(富士市立中央図書館 2007、69 頁)と記しており、その記載は、古くからの伝承を記したものと、自ら見聞したものの2種類から構成されているという点である。

そして、富士塚についても、その記載は伝承によるもので、すでに富士山の参詣者が石を積むという行事はおこなわれていなかったのか、それとも植松蓮知自身が、実際に富士山への参詣者が石を積んでいる様子を見たのかということを明確に判別する記載については確認することができない。つまり、石を積んで安全を祈願するという信仰形態が享保18年(1733)まで確実におこなわれていたとは必ずしも断定できないということを指摘しておきたい。

いずれにせよ、鈴川の富士塚は、植松蓮知によって初めて地誌に取り上げられることとなった。そして、その後続く、この地域について記した近世の地誌類にも富士塚の記載を確認することができる。

まずは、文政元年(1820)に桑原藤泰がまとめた『駿河記』があげられる。この中で、鈴川の富士塚については、以下のように記されている。

砂にて築上たる塚にて、上に富士浅間の小祠あり。
富士禪定する者濱に下りて垢離をとり、石一つづかつぎ上、此塚の上にて禪定の禳をするに依て其名あり(桑原 1974、156 頁)

さらに、ほぼ同時期に、江戸時代後期の国学者である新庄道雄によってまとめられた『駿河国新風土記』にも、

鈴川の富士塚について以下の記述が確認できる。

砂にて築上たる塚にて、上に富士浅間の小祠あり、富士禪定する者、浜へ下りて垢離をとり石一つづつかつぎ上、此塚の上にて禪定の禳をするに依て富士塚の名あり、(新庄 1995、1277 頁)

ここで取り上げた2種の地誌における富士塚の記載は、異なる筆者にも関わらず、全くとって良いほど同じ内容となっている。さらには、その内容は、『田子の古道』の記載を要約したものにすぎない。この状況から鑑みると、桑原藤泰と新庄道雄は、実際に自らの目で富士塚そのものや富士塚にまつわる習俗を見たというよりも、『田子の古道』を参照しただけではないのかという可能性が浮かびあがる。

一方、幕末の文久元年(1861)に駿府浅間神社(静岡浅間神社)の神職を勤めた新宮高平によって著された『駿河志料』には、以下のように、従来の富士塚の記載に加えて、興味深い一節が加えられている。

祓潔の場なり、上に云、大宮浅間神事祓潔のとき垢離の後、大宮司社人富士塚に参詣し、御祓正鑑取次第記にあり 又富士登山の者汐垢離をとり、石一ツ宛かつぎ上、此塚の上に置て祓をす、因て是を富士塚と稱す(中村 1969、300 頁)

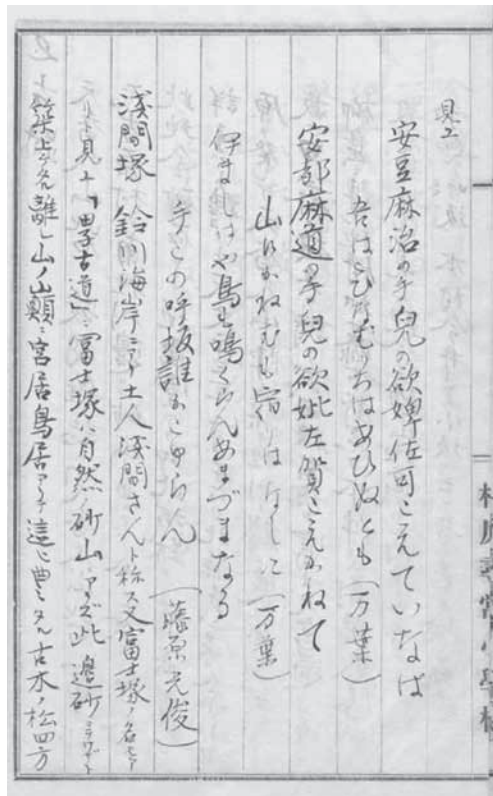
ここでは、大宮浅間(富士山本宮浅間大社)の神事の際に、大宮司の社人が富士塚に参詣していることが記されている。そして、この記載の根拠として、「御祓正鑑取次第記」という史料が挙げられている。荻野裕子は、新宮高平が取り上げたこの史料として、慶安3年(1650)の奥書を持つ富士山本宮浅間大社の「富士本宮年中祭礼次第」である可能性を指摘している(荻野 2006、5 頁)。ここには、卯月初申より七日以前之寅ノ日(旧暦の4月上旬・新暦では4月下旬から5月上旬か)に浜に下りて赤飯を食べ、大宮司と庶子衆、御祓役人正鑑取が垢離の後に富士丘(富士塚のことか)に参詣すると記されている(浅間神社社務所 1973、24 頁)。また、その奥書には、古来の次第を写したものであることが記されており、富士山本宮浅間大社による祭礼は江戸時代以前まで遡ることも可能であるかもしれない。

さらに荻野は、同様の記述が見られる史料として、同社の「古来所伝祭式」を挙げている(荻野 2006、4 頁)。この史料は明治年間に編纂されたもので、4月下旬の寅の日に社員一同が鈴川の海岸で禊をおこない、その後、大宮司・公文・案主の神職が富士丘(富士塚のことか)に参詣し、正鑑取が祓をおこなうと記されている(浅間神社社務所 1973、58 頁)。これらのことから、少なくとも江戸時代の初期から明治にかけて、富士塚は富士山本宮浅間大社による祭礼が執り行われていた場所であったことがわかる。

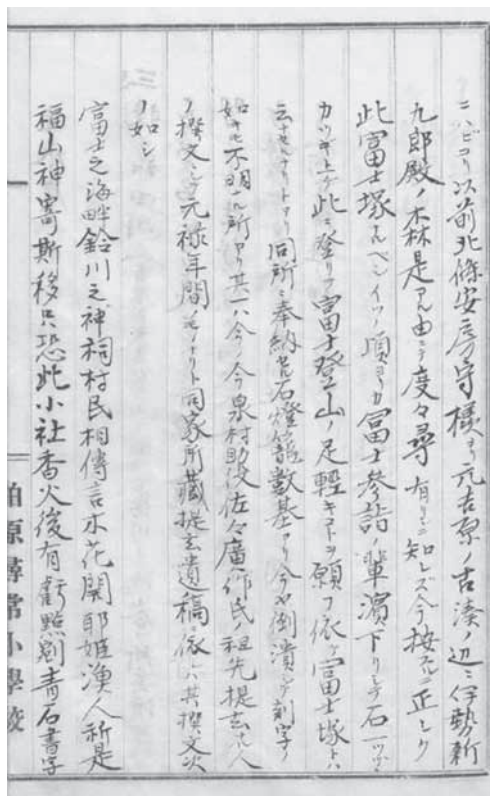
加えて、近代の地誌においても、富士塚を取り上げたものが散見できる。このうち、まずは明治40年(1907)から44年(1911)まで吉原に居住した山中共古が、滞在中に見聞したことをまとめた『吉居雑話』内の記載内容を取り上げたい。それによると、砂山海岸に石塚があり、その塚の頂上には、石造の小さな社があると記される。また、塚の側には享保2年(1717)3月の銘を持つ石灯籠があるという。さらに、この石灯籠には、「浅間廣前」という言葉と「丸に三の紋」が刻まれており、頂上の小さな社は浅間大神を祀っているものだ指摘している(成城大学民俗学研究所 1984、12 頁)。

ここでは、富士塚という表記はされていないが、石の塚であるということ、さらに塚の頂上に小さな社があるということは、『田子の古道』の記述と矛盾していないことから、鈴川の富士塚について記したものであると言えるだろう。そして、これまで紹介した地誌類には見られなかったが、『吉居雑話』では上記の記述とともに、塚の様子を描いた挿絵が所収されており、当時の状況をより具体的に知ることができる。

『吉居雑話』に加えて、近代の鈴川の富士塚について記載した地誌に、富士郡誌を編纂するための資料として、大正元年(1912)に元吉原尋常小学校と柏原尋常小学校の連名で執筆された「郡誌編纂資料副本」というものがある。これには、浅間塚という項目が挙げられており、地域の人々は浅間さんと呼んでいると記されている。さらに、『田子の古道』を引用して、富士塚という名称もあるとする(第46図)。加えて、塚の周辺には倒れた石灯籠が数基あり、そのうちの一つに、今泉の佐々提玄なる人物が元禄年間に撰文した文章が刻まれているという(第47図)。この文章については、佐々家に遺稿が残されているとし、以下のように全文を掲載している。



第 46 図 「郡誌編纂資料副本」 浅間塚項目 1
(静岡県立中央図書館蔵)



第 47 図 「郡誌編纂資料副本」 浅間塚項目 2
(静岡県立中央図書館蔵)

富士之海畔鈴川之神祠村民相傳言木花開耶姫漁人祈
是福山神寄斯移只恐此小社香火後有□點剗青石書字
植水崖 佐々統提玄撰

この『郡誌編纂資料副本』の記述と撰文に記された文言によると、鈴川の富士塚の付近にある石灯籠の一つは、元禄年間に鈴川の村民が奉納したものであり、漁師たちが小社に祀られている木花開耶姫に祈りを捧げていたことがわかる。

ここまで、近世から近代にかけての地誌類において、鈴川の富士塚がどのように記述されてきたのかについて見てきた。そこからは、大正初期までは石を積んだ塚そのものは存在し続けていたということが明らかであろう。そして、鈴川の富士塚に対する信仰形態として、以下の3つのパターンが存在していたということを指摘できる。一つ目に、富士山の登山者が自らの登山の安全を祈願するという。二つ目に、地元の漁師たちが木花開耶姫に祈りを捧げる場所であったということ。三つ目に、富士山本宮浅間大社の祭礼がおこなわれる場所であったということである。

このうち、一つ目のパターンである登山者による安全祈願については、基本的には『田子の古道』を踏襲した記載にとどまっており、各種の地誌類が『田子の古道』以降に記されたものであっても、それらが当時の状況を実際に見聞して記述したとは考えにくく、地誌類の記載だけで近世から近代にかけて登山者が石を積み続けていたと主張することは無理があるのではないだろうか。

また、二つ目のパターンについては、その根拠となるものが、江戸時代初期に石灯籠に刻まれた撰文のみであり、それだけで近世から近代にかけて存在し続けていたと断定することは困難である。

最後に、三つ目のパターンである富士山本宮浅間大社の神事の場合であったということであるが、史料の上では江戸時代以前から明治まで神事が執り行われていた可能性を指摘することができる。ただし、明治・大正期の地誌類には神事の記載が見られない。このことは、これらの地誌類が記された時期には、神事そのものはすでに実施されていなかったことを示すのではないだろうか。

このように、近世から近代にかけての地誌類の分析からは、鈴川の富士塚には、いくつかの種類の信仰形態が

のは、「田子ノ浦」という表記のみで、富士塚の記載や塚の表現は見られない。本図の中には、富士登山を終えた道者が用いる下山専用のルート（下向道）や精進明けの垢離場が描かれている一方で、富士塚が描かれていないということは、当時としては、鈴川付近での水垢離や安全祈願のために富士塚に石を積むということが、登山の前に必要なこととして認識されていなかったのではないだろうか。それを裏付けるように、東海道を西から進んで富士川を渡った先に「富士山道」と刻まれた石碑が表現されており、登山のスタート地点が別の場所に設定されているのである。

③駿州吉原宿絵図 文政10年（1827）

富士山かぐや姫ミュージアム蔵（第49図）

東は愛鷹山、西は富士川、南は駿河湾、北は富士山の山頂までを収める。絵図右肩にタイトル、左側の余白に「文政十丁亥年初夏開板之 吉野保五郎板」とあり、発行年と版元を知ることができる。版元の吉野保五郎という人物の詳細は不明であるが、吉原宿が表現されている部分に「本家山神丸製所」とあり、また、そのやや右下には山神丸という菓を求めた人物にはこの絵図を差し上げるとの記載があることから、吉原宿の菓屋から依頼を受けて製作した、あるいは菓屋に関わる人物と想像できる。

なお、絵図には、富士山の山頂へと至るルートとともに、数多くの宗教施設が記される。また、名物や名所旧跡も記載されており、道者のみならず、より広い層へと頒布することを目的に製作されたことがうかがえる。

さて、本図の右端には浮島原から流れる沼川とそれ

を渡る川合橋（河合橋）が描かれる。川合橋の右手が鈴川付近であるが、ここで表現されているのは「砂山地蔵」の文言と堂舎と思われる建物の姿のみであり、富士塚の記載や塚の表現は見られない。

④駿河国富士山絵図 江戸時代

富士山かぐや姫ミュージアム蔵（第50図）

東は愛鷹山、西は岩淵村、南は駿河湾、北は富士山の山頂までを収める。絵図右肩にタイトル、左下隅に「富士山別当表 村山興法寺三坊蔵板」とあり、村山修験の中心的な役割を果たした池西坊、大鏡坊、辻之坊の三坊が発行主体となったことがわかる。その内容は、先に取り上げた駿州吉原宿と酷似しているが、上部余白に富士山の略縁起、異名、仏尊名を記すという点で、より仏教的側面が濃いものとなっている。さらに、前掲の駿州吉原宿絵図においては、吉原宿から大宮へ向かう道を「大宮道」と強調しているのに対して、本図では吉原宿から大宮へ向かう道は強調されておらず、逆に吉原宿から村山へ向かう道を「登山道」として強調している。また、駿州吉原宿絵図において「本家山神丸製所」と記されていた部分には、「エツ弘所」（絵図広め所）とあり、吉原宿において頒布されていた絵図であることがわかる。こうした点からも、文政10年（1827）に開板された駿州吉原宿絵図とそれほど変わらない時期に発行された可能性があるのではないだろうか。

本図における鈴川付近の描き方であるが、前掲の駿州吉原宿絵図にも表現されていた砂山地蔵及びその堂舎と思しき建物に加え、阿字神社とその社殿、そして「字生贄」という地名が表記されている。ただし、本



第49図 駿州吉原宿絵図 部分



第50図 駿河国富士山絵図 部分

図は村山興法寺が主体となって製作したものであるのにも関わらず、富士塚の記載や塚の表現は見られない。

⑤富士山表口真面之図 江戸時代

富士山かぐや姫ミュージアム蔵（第51図）

東は沼津の千本松、西は三保の松原、南は駿河湾、北は富士山の山頂までを取める。絵図の右肩にはタイトル、左肩には村山興法寺の縁起と村山興法寺の三坊が版元であることが記される。さらに、本図の左下には「麗山白石図」とあり、本図は江戸時代後期に活動し、山梨鶴山、柴田泰山と並んで庵原三山の一人として称された神戸麗山の手によるものであることがわかる。富士山図を得意にした麗山であるからか、富士山南麓の様子を写実的に描き、各場所に注記が入る。

さて、本図の下部やや右寄りが鈴川付近であるが、富士塚の記載や塚の表現は見られないが、その一方で「天ノカク山」（天香具山）の表記と、小さな丘の表現を見ることができる。このことから、本図が発行された江戸時代後期においては、鈴川付近の砂丘部は、天香具山と呼ばれることもあったことがわかる。



第51図 富士山表口真面之図（江戸時代）部分



第52図 富士山表口真面之図（明治10年）部分

⑥富士山表口真面之図 明治10年（1877）

富士山かぐや姫ミュージアム蔵（第52図）

先に取り上げた神戸麗山が描き、村山興法寺が版元となった富士山表口真面図の明治期の改版。江戸期のものと異なる点として、村山興法寺の縁起を記した部分に村山から各地へ向かう際の距離を記しているほか、「麗山白石図」と記されていた場所には、画工・彫工として江戸時代後期から明治にかけて活躍した彫師、太田駒吉の名が記されている。また、神仏分離令の影響もあってか、江戸期の富士山表口真面之図に記載されていた山中の仏教施設の多くは名称が変更されているほか、注記が削除されている。

さて、江戸期の富士山表口真面之図と同様に、鈴川付近においては、「香久山」の表記と小さな丘の表現を見ることができる。また、富士塚の記載や塚の表現は見られない。

⑦駿河国富士山表口全図 明治11年（1878）

富士山かぐや姫ミュージアム蔵（第53図）

東は愛鷹山、西は三保松原、南は駿河湾、北は富士山の山頂までを俯瞰的に描いたもの。絵図の右肩にはタイトルと「直立一千四百十七丈」とあり、富士山の高さを示している。山頂左の余白には、富士山の縁起が記され、左下隅には「明治十一年六月御届 静岡県平民 著者 出版人 藤田與一郎」とある。

これまでの絵図と同様に、宗教施設や名所旧跡、街道沿いの村々の地名などが記載されている。本図右下には鈴川及び砂山の地名が記されているが、富士塚あるいは天香具山の表記、塚の表現などは見られない。ここで取り上げた7点の富士山の登山絵図以外にも、



第53図 駿河国富士山表口全図（明治11年）部分

富士山かぐや姫ミュージアムにはいくつかの富士山表口の登山絵図が所蔵されているが、いずれの絵図にも富士塚の記載や塚の表現を確認することができなかった。

ここまで述べてきたように、登山絵図というビジュアルメディアの中において、富士塚について記載したり、塚を表現したものは全く見られなかった。登山絵図の発行の目的の一つに、富士山へと登る道者の利便に供するとともに、誘客を意図しているという点があるが、この点から鑑みれば、富士登山にとって必要な場所や施設、魅力的な場所や施設は必然的に書き込まれるはずである。しかし、富士塚の記載や塚が書き込まれていないということは、最も古い絵図である「富士名所盡」が発行された延宝8年（1680）の段階ではすでに、富士山へと登る道者が鈴川の海岸で水垢離をおこない、登山の安全を祈願して富士塚に石を積むという行為は重要視されていなかった可能性が高い。

この仮説に基づけば、享保18年（1733）に記された『田子の古道』における富士塚の信仰形態は、筆者が自ら見聞したことを掲載したというよりも、古くから言い伝えられてきたものを掲載したのではないだろうか。

一方で、鈴川の付近には、「砂山地蔵」という表記や堂舎の表現、「天香具山」という表記や小さな砂丘の表現が見られる。これらの記載が確認できるということは、登山絵図が発行された当時の人々が、鈴川付近において特筆すべきものとして認識していたことの証左であるといえよう。特に、鈴川付近の砂丘を「天香具山」と呼称することは近代以降も引き継がれていたことが、次節で取り上げる絵葉書というビジュアルメディアからも知ることができる。

3. 絵葉書から見る鈴川の富士塚

明治33年（1900）、郵便法の改定により、それまで認められていなかった私製葉書の発行が許可された。それから4年後の日露戦争中に、当時の通信省が戦争に関わる画像を掲載した絵葉書を発行したことが、国内の熱狂的な絵葉書ブームに火をつけることとなった。以降、昭和初期にいたるまで、人々の間で絵葉書を送り、送られるといった文化が大いに流行し、数多くの絵葉書が発行されてきた。

こうした流行を背景に、人々の間で流通することを前提として、当時の人々の関心を引く様々な事象が題材と

された。特に、戦争を題材にしたものや災害を題材にした絵葉書は、速報性があり、かつ画像情報も持つことから、新聞などに匹敵するマスメディアとしての機能も有していた。さらには、当時の旅行ブームに乗り、各地の名所の写真や絵画を掲載した名所絵葉書が大量に発行されることとなる。

また、絵葉書には画像だけではなく、掲載された画像に対応したタイトルがつけられている場合や、その絵葉書の製作者や印刷者についての情報が記載されている場合もある。加えて、宛名面の体裁や消印からある程度の発行年代や使用年代が判明する場合もある。これらの特徴を有するが故に、絵葉書の持つ情報を分析することにより、その絵葉書が発行された時代における人々の認識や状況を、より具体的に知ることができる。

そこで、本節では、鈴川付近の情報を掲載した絵葉書を取り上げ、当時の人々がこの地域のことをどのように捉えていたのか、そしてその中で鈴川の富士塚はどのような状況であったのかということを検討してみたい。

①鈴川の富士 Fuji Mountain of Suzukawa

筆者蔵（第54図）

宛名面の体裁から発行年代は明治40年（1907）4月1日から大正7年（1918）3月31日の間に分類される。画面右下にトンボの形のロゴが入っていることから、横浜の絵葉書問屋、トンボ屋（明治40年開業）発行のものとわかる。

画面奥中央には富士山が配され、右手には石が積まれた砂の塚が写る。この塚が鈴川の富士塚である可能性が高いが、タイトルには富士塚の名称は採用されていない。塚の周辺に下草は見え、ある程度手入れはされているようである。

②（富士勝景）天の香具山の富士 Mt Fuji seeing from Amanokakuyama

筆者蔵（第55図）

宛名面の体裁から発行年代は大正7年（1918）4月1日～昭和8年（1933）2月14日の間に分類される。発行は東京神田橋筒井盛華堂。

①の絵葉書とほぼ同じカットであるが、①よりも塚の近くから撮影されている。塚には、拳よりもかなり大きい石が積まれている様子が見て取れる。赤色に彩色されている石が散見されるが、その意図は不明である。なお、タイトルには富士塚の名称は採用されず、「天



第 54 図 鈴川の富士

の香具山」が採用されている。

③東海名所 天之香具山の富士

筆者蔵 (第 56 図)

宛名面の体裁から発行年代は大正 7 年 (1918) 4 月 1 日～昭和 8 年 (1933) 2 月 14 日の間に分類される。発行は伏見寫眞堂。

①及び②の絵葉書とほぼ同じカットであるが、①よりも塚の遠くから撮影されている。そのため、塚の麓には石灯籠、塚の頂上部には石の祠が写る。前述した山中共古の『吉居雑話』に所収された挿絵に似た風景写真が掲載された絵葉書である。なお、タイトルには富士塚の名称は採用されず、「天之香具山」が採用されている。

④ (富士勝景) 鈴川附近ヨリ見タル富士

富士山かぐや姫ミュージアム蔵 (第 57 図)

宛名面の体裁から発行年代は大正 7 年 (1918) 4 月 1 日～昭和 8 年 (1933) 2 月 14 日の間に分類される。発行元の情報は掲載されていない。また、表口六合目馬返の記念印が捺されている。

画面奥中央に富士山を配し、手前の小さな高まりの上に三本の松、小さな祠、鳥居が写る。①から③までの絵葉書とは明らかに異なる場所を撮影したものであ

るが、鈴川の漁師による魚群の監視場でもあり、海からの目印としたとされる三本松 (物見の松) か (鈴木 1981、466 頁)。

⑤ (富士新八景) 天之香具山の富士 View of Mt fuji from Amanokaguyama

富士山かぐや姫ミュージアム蔵 (第 58 図)

宛名面の体裁から発行年代は大正 7 年 (1918) 4 月 1 日～昭和 8 年 (1933) 2 月 14 日の間に分類される。発行元は東京今川橋青雲堂。

④の絵葉書と同じカットであるが、より海岸に近いところから撮影されており、手前には大きく漁船が写る。タイトルには「天之香具山」が採用されている。

⑥東海道香具山富士

富士山かぐや姫ミュージアム蔵 (第 59 図)

宛名面の体裁から発行年代は大正 7 年 (1918) 4 月 1 日～昭和 8 年 (1933) 2 月 14 日の間に分類される。発行元の情報は掲載されていない。

④及び⑤の絵葉書と同様に三本の松が写るが、より近い距離から撮影したものか。そのため、一番右側の松は見切れている。タイトルには「香具山」が採用されている。

⑦静岡 鈴川付近之富士 Mt.Fuji



第 55 図 (富士勝景) 天の香久山の富士 (部分)



第 58 図 (富士新八景) 天の香久山の富士 (部分)



第 56 図 東海名所 天之香久山の富士



第 59 図 東海道香具山富士 (部分)



第 57 図 (富士勝景) 鈴川附近ヨリ見タル富士 (部分)



第 60 図 静岡 鈴川付近之富士

筆者蔵 (第 60 図)

発行元は掲載されていない。④、⑤、⑥の絵葉書と同じ松と富士山が写る。ただし、前述の絵葉書に写っていた三本の松のうち、一番左側の松が失われている。宛名面の体裁から、発行年代は明治 33 年 10 月 1 日から明治 40 年 3 月 31 日の間に分類されるが、実際は④、⑤、⑥の絵葉書よりもやや後の時代に発行されたものか。ただし、宛名面に「郵便はかき」と右から左に記されていることから、大正 7 年 (1918) 4 月 1 日～昭和 8 年 (1933) 2 月 14 日の間の発行と考え

ることに矛盾はない。また、④、⑤、⑥の絵葉書よりも松周辺の下草が目立つ。

⑧砂丘を越えて 国立公園富士・香具山より Wonderful Fuji-yama from Kaguyama, Fuji National Park

筆者蔵 (第 61 図)

発行元として、「TRADE MARK TAISHO WAKAYAMA」の記載を確認することができる。宛名面の体裁から発行年代は大正 7 年 (1918) 4 月 1 日～昭和 8 年 (1933) 2 月 14 日の間に分類されるが、富士山が国立公園に指定されたのは昭和 11 年 (1936) 2 月 1

日であることから、昭和 11 年から昭和 21 年（1946）12 月 26 日の間に発行されたものと考えられる。

写真には、⑦の絵葉書と同じ松が写る。ただし、松の周辺にはかなり下草が繁茂しており、人の手が入らなくなってしまった様子がうかがえる。なお、タイトルには「香具山」が採用されており、解説文として「海岸ではないが如何にもその感深い砂丘が連なつて美しい風景を展開してゐる。富士を見るに實に絶好地と稱され、附近勝地の壓巻とさえ言晴れてゐる。」と記され、この地からの景色を絶賛している。

ここで取り上げた絵葉書からは、明治から昭和初期にかけては、鈴川の砂丘から見る富士山の風景が名所の一つとしてある程度知られていたことがわかる。その背景には、明治 22 年（1889）に東海道本線の鈴川駅（現在の吉原駅）の開業を受けて、鈴川周辺地域が富士山を眺めることができる風光明媚な場所としてリゾート開発されたことが挙げられる。また、明治天皇の皇后である昭憲皇太后がこの地域をたびたび行啓（註 2）したことも、当時の名所化の大きな要因であった。

そして、富士山とともに所収されたものとして、山中共古が『吉居雑話』内に描いた塚（鈴川の富士塚）、地元で「三本松」（大正期に 1 本倒れ、2 本となる）と呼ばれた松が選択されている。

それぞれの絵葉書のタイトルからは、鈴川周辺地域に対する認識について知ることができる。その表記のパ

ターンとしては、単にこの地域の名称である鈴川とする場合と、「天香具山」という名称を用いる場合の二つに分けることができる。やはりここでも富士塚という名称は一切用いられておらず、明治から昭和初期にかけても富士塚をめぐる言説は意識されていなかった様子がうかがえる。一方で、いくつかの表記があるが、塚や三本の松を含めた砂丘一帯を「天香具山」と表現しており、鈴川周辺の名所旧跡が「天香具山」という名所に内包されてしまった状況が指摘できる。

ただし、鈴川の富士塚自体は、失われるということではなく、山中共古が『吉居雑話』内に描いた様子を留めており、周辺の植生からも、ある程度の人の手が入り、景観として維持はされていたようである。その背景に、塚を守ろうとする積極的な意思があったのか、それとも松葉を焚付として利用するために採取するなどによって結果的に景観が維持されていたのかについては、今後の聞き取り調査に委ねたい。

いずれにせよ、この当時まで維持されてきた鈴川の富士塚の景観は、戦後大きく変化することとなる。次節ではその様子を、空中写真というビジュアルメディアから辿ってみたい。

4. 空中写真から見る鈴川の富士塚

空中写真とは、航空機から地上を撮影した写真で、昭和 26 年・27 年の米軍による国土全域の撮影以降、国



第 61 図 砂丘を越えて 国立公園富士・香久山より

土地地理院や自治体により定期的に撮影されてきた。そのため、戦後から現在に至るまで、特定の場所の定点観察が可能で、場合によっては土地利用の変遷などをたどることができる。ここでは、昭和 27（1952）年の空中写真を皮切りに、現在の鈴川の富士塚周辺の様子を概観してみたい。

①昭和 27 年（M-198）

現在の鈴川の富士塚周辺は、松林に覆われており、塚状のものを確認することはできない。一方で、現在の鈴川の富士塚からやや南方（現在、文化財の案内看板が設置されている場所付近）には、円錐形の盛り上がり確認できる（註 3）。

この盛り上がりが山中共古の『吉居雑話』中に所収されている塚の挿絵、あるいは先に紹介した絵葉書に掲載された塚である確証はないものの、ここに塚があったことを想定すると、絵葉書に見られる景観とそれほど矛盾しないことを指摘しておきたい。



第 62 図 鈴川の富士塚付近の空中写真①
「米軍撮影の空中写真（昭和 27 年撮影）」
（△の交点が円錐状の盛り上がり）

②昭和 36 年（C28-10）

昭和 27 年の空中写真で確認することができた現在の鈴川の富士塚からやや南方に位置する盛り上がりは、昭和 36 年の段階でも残っているようである。一方で、昭和 27 年には松林に覆われていた現在の鈴川の富士塚が位置している場所は、昭和 36 年の段階で松林の範囲がやや狭くなっており、林床の一部を確認

することができる。ただし、そこに人工的に積み上げた盛り上がりを確認することはできない。



第 63 図 鈴川の富士塚付近の空中写真②
「国土地理院撮影の空中写真（昭和 36 年撮影）」

③昭和 46 年（CB-71-3 C8-11）

昭和 36 年と比べると、現在の鈴川の富士塚周辺はかなり松林に覆われる状況となり、林床は全く確認することができなくなっている。また、昭和 36 年の空中写真まで確認することができた現在の鈴川の富士塚からやや南方に位置した盛り上がりは、この段階では失われてしまっているようである。



第 64 図 鈴川の富士塚付近の空中写真③
「国土地理院撮影の空中写真（昭和 46 年撮影）」

④昭和51年（C CB-75-31 C5B-11）

昭和51年は、現在の鈴川の富士塚の形態へと造成工事された年である。この写真は、工事直前の様子を撮影したものか。塚周辺は松林に覆われ、塚の盛り上がりは確認できない。また、塚の南西部まで宅地開発が進んでおり、現在へと繋がる街並みが形成された時期である。



第65図 鈴川の富士塚付近の空中写真④
「国土地理院撮影の空中写真（昭和51年撮影）」

⑤昭和52年（CB-77-5 C8-12）

現在の鈴川の富士塚造成直後の空中写真。新しく造成された塚周辺の松林が伐採され、かなり開けた状況となっている。また、参道も整備されたようで、塚の



第66図 鈴川の富士塚付近の空中写真⑤
「国土地理院撮影の空中写真（昭和52年撮影）」
（△の交点が新たに造成された鈴川の富士塚）

南北に伸びる道が確認できる。ただし、塚周辺及び参道以外の場所は松林に覆われている。

⑥昭和63年（C10-24）

現在の鈴川の富士塚が造成されてから12年後の空中写真。造成直後は塚及び参道の上は松林が開けていたが、12年後の昭和63年にはほとんど確認できない状況となっている。塚周辺の松林が旺盛に成長した様子がうかがえる。



第67図 鈴川の富士塚付近の空中写真⑥
「国土地理院撮影の空中写真（昭和63年撮影）」

⑦平成2年

昭和63年よりもさらに松が成長し、わずかに確認できた塚と参道が全く確認できない状況となっている。



第68図 鈴川の富士塚付近の空中写真⑦
「国土地理院撮影の空中写真（平成2年撮影）」

この状況では、林床はかなり暗い環境となっていた様子がうかがえる。その後、平成 5 年、平成 12 年の空中写真においても、状況はそれほど変化していない。

⑧平成 17 年

塚周辺の松が皆伐され、周囲が開けた状況となる。平成 12 年から平成 17 年の間のどこかで、現在の鈴川の富士塚周辺の景観が形成されたことがわかる。



第 69 図 鈴川の富士塚付近の空中写真⑧
「国土地理院撮影の空中写真（平成 17 年撮影）」

ここでは、昭和 27 年以降に撮影された空中写真から現在の鈴川の富士塚周辺の状況を概観した。昭和 27 年及び昭和 36 年の空中写真には、現在の鈴川の富士塚からほど近い場所に、円錐形の盛り上がりが確認できたものの、それが山中共古によって描かれた鈴川の富士塚、あるいは絵葉書に掲載された鈴川の富士塚であるとの確証を得ることはできなかった。同時に、現在の鈴川の富士塚の場所については、松林に覆われており、そこに塚状のものがあつたのかどうかについても、空中写真からは判断することはできなかった。

いずれにせよ、現在の鈴川の富士塚の周辺は長期間にわたって松林に覆われ、明治から昭和初期の絵葉書に見られた塚と富士山という景観は長らく失われていたということが空中写真の分析から明らかとなった。そこからは、明治から昭和初期にかけて存在していた、富士山の風景が素晴らしい名所の一つとしての認識も失われてしまっていたということが指摘できる。その後、昭和 51 年に、鈴川の富士塚をめぐる言説の一つである富士山信

仰に関わる史跡ということに基づき、新たな富士塚が造成されたものの、その状況は大きく変化することはないかったようである。そして、現在の鈴川の富士塚周辺の景観が形成されたのは、わずか 10 数年前のことであった。

おわりに

本論では、鈴川の富士塚の実像を探ることを目的に、地誌類に記された言説及び、登山絵図・絵葉書・空中写真というビジュアルメディアから分析をおこなった。その結果として、富士山へ登る道者が安全祈願のために石を積んだという習俗は、江戸時代の初期にはすでに失われていた可能性が明らかとなった。その後、塚自体は失われることはなかったものの、人々の中で、富士山信仰に関わる塚という認識は徐々に失われていき、明治から昭和初期にかけては、「天香具山」という大きな名所の中へと内包されていくこととなった。さらに、戦後には、名所としての認識も失われてしまっていた。

ところが、昭和 51 年にはそれまでの塚があつたとされた場所に、新たな富士塚が造成される。その造成の拠り所となったのは、富士山信仰に関する史跡であるという言説であつた。この言説が採用された背景には、昭和 30 年代後半に写本が発見され、研究が進められた『田子の古道』に記された記述の影響がかなり大きかつたのではないかと推測される。さらに、平成 15 年前後には、新たな塚周辺の松が皆伐され、塚と富士山という景観が復活することとなる。

このように、現在の鈴川の富士塚は新たに造成されたもので、史跡としての評価は今後慎重に検討しなければならないが、その造成により、富士山信仰にまつわる場所であつたということや、富士山を美しく眺めることのできる名所であつたことに対する再認識がおこなわれ、それが現在に至っているという点では、ある種の記憶装置として重要な価値を有しているともいえるだろう。

【註】

- 1 『田子の古道』の著者については、昭和30年代後半に『田子のふるみち』（森家本）が発見されて以降、吉原宿の住人姉川一夢とする説や植松蓮知とする説、植松蓮知とその息子源七郎の合作説などの諸説が検討されてきた。本稿では、森家本の発見以降確認された10冊を超える写本や関係資料の比較検討から、植松蓮知を作者とする福沢清氏の説を採用する（富士市立中央図書館2007）。
- 2 昭憲皇太后は、沼津御用邸に滞在中、6回（明治39年、明治40年、明治43年（3回）、明治44年）にわたって鈴川を行啓している（打越2014、174-175頁）。また、昭憲皇太后が沼川と潤井川の合流点付近に船で渡ったということから、その地は皇后の敬称である「きさいのみや」に因んで「喜歳島」と名付けられ、数多くの絵葉書や石版画の題材となっている。
- 3 この盛り上がりについては、空中写真による地形判読の第一人者である長谷川裕彦氏（明星大学）に判読を依頼し、ご指摘いただいた。ここに記して厚く御礼申し上げたい。

【参考文献】

- 打越孝明 2014『御歌とみあとでたどる明治天皇の皇后昭憲皇太后のご生涯』角川書店
- 荻野裕子 2006「富士講以外の富士塚―静岡県を事例として―」『民具マンスリー』第38巻10号
- 菊池邦彦 2012「富士山東泉院を訪れた人々」『六所家総合調査だより』第11号
- 桑原藤泰 1974『駿河記』下巻 臨川書店
- 新庄道雄 1975『駿河国新風土記』下巻 図書刊行会
- 鈴木富男 1981『鈴川の歴史』鈴川区管理委員会
- 成城大学民俗学研究所 1984『諸国叢書』
- 浅間神社社務所 1973『浅間文書纂』名著刊行会
- 中村高平 1969『駿河志料』二 歴史図書社
- 富士市立中央図書館編 2007『田子の古道』